

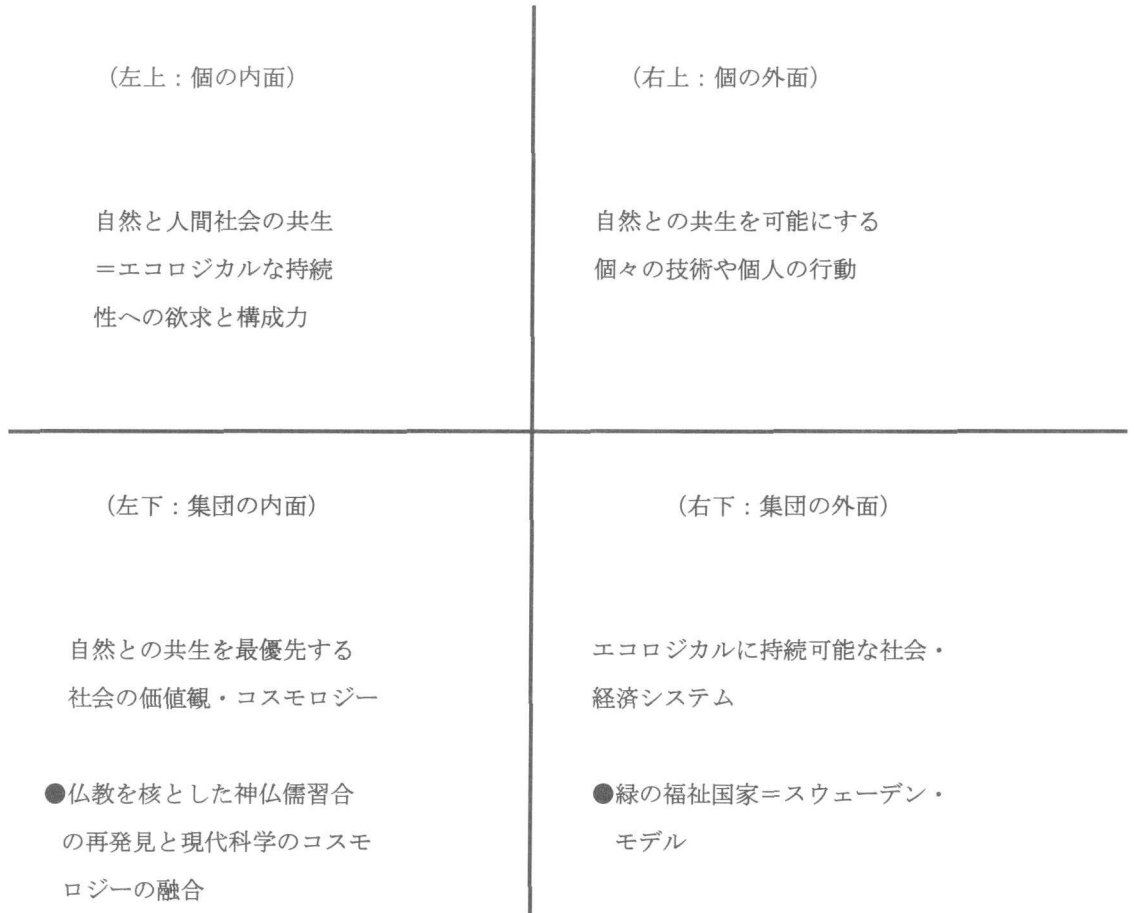
新しいコスモロジーと緑の福祉国家

著者	岡野 守也
雑誌名	「エコ・フィロソフィ」研究 別冊
号	6
ページ	121-125
発行年	2012-03
URL	http://doi.org/10.34428/00005192

「新しいコスモロジーと緑の福祉国家」

サングラハ教育・心理研究所 岡野守也

自然との共生＝持続可能な社会の実現のためには、以下のような4象限にわたる条件が満たされる必要があると思われる（K・ウィルバーの「存在の4象限」）。



自然との共生の実現＝エコロジカルな持続性は、いうまでもなく地球生態系規模にまで至らなければ完結しないが、現在、世界は国民国家単位で営まれているので、私たちの課題も当面まず、私たちの国日本をいかにしてエコロジカルに持続可能な国にするか、ということになるのではないかな。

原点としての「十七条憲法」－神仏儒習合－仏教の意味を再発見し、現代科学のコスモロジーと融合し、スウェーデン・モデルを参照すると、その先に自然と共生する＝エコロジカルに持続可能な日本が見えてくるのではないかな。

発表要旨 岡野守也

新しいコスモロジーと緑の福祉国家

サングラハ教育・心理研究所
主幹 岡野守也

コスモロジーの
心理学

コスモス・セラピーの原理と実践

岡野守也

SHUN OKANO

聖徳太子
「日本書紀」に
記された
神代文字
の読み解き

日本再生の
指針

岡野守也

自然との共生＝持続可能な社会の実現のためには4象限に
わたる条件が満たされる必要があると思われる。

K・ウィルバーによる「存在の4象限」

(左上:個の内面)

Ex. 購買意欲
Ex. 自然と人間社会の調和
への欲求と構想力

(右上:個の外面)

Ex. 消費行動
Ex. 環境適合的な個別の技術
個人の行動

(左下:集団の内面)

Ex. 文化としての貨幣経済
Ex. 環境との調和を最優先する
社会の価値観

(右下:集団の外面)

Ex. 商品流通システム
Ex. 環境と調和した社会・
経済システム

仏教を核とした神仏儒習合
と現代科学のコスモロジー

緑の福祉国＝スウェーデン・モデル

近代科学は、自分(主体)と世界のすべてのもの(客体)が分離してい
ることを前提に、世界のすべてを「ばらばらのモノ」に分析し、その組み
合わせとして理解しようとする。それにはもちろん一定の有効性・妥当性
があり、近代文明の中心的な推進力となってきたが、大きな欠点があ
る。

近代科学の世界観＝コスモロジーは、基本的に無神論であり、初期
のヒューマニズム的な「神はいない。人間とモノだけがある」というコスモ
ロジーから、やがて物質還元主義・唯物論的な「モノだけがある＝すべ
てはモノにすぎない」という考えに行き着き、その結果、「神＝絶対者が
いない以上、絶対の意味も絶対の倫理もない」というニヒリズムに陥る。

ニヒリズムの視点からは、自然との共生＝持続可能な社会を創らな
ければならないというエコロジカルな倫理も相対化され、普遍的なもの
とは見なされない。

ところが、「近代科学」と、十九世紀末から二十世紀いっばいにかけて
形成されてきた、「現代科学」との間は大きな飛躍があり、「現代科学」で
は、「すべてはモノにすぎない」というコスモロジーは決定的に克服され
ており、したがってニヒリズムも克服される。

現代科学の重要な5つの学説

1869年、ヘッケルによるエコロジー(生態学)の提唱から始まり、2
0世紀全体をとおして、地球上ではすべての非生命・環境とすべての生命
が互いにバランスをとりながら1つのシステムをなしていることが明らか
になってきた。

1905年、アインシュタインの相対性理論により、宇宙は究極のところ
物質というよりエネルギーからなっていることが明らかにされた。

1947年、ガモフのビッグバン仮説。これが正しいとすると、宇宙はも
ともと1つのエネルギーの玉だったことになる。

1953年、ワトソンとクリックの遺伝子の2重らせん構造の発見。19
62年にノーベル賞を受賞。以後の研究により、すべての遺伝子が1つの
源泉にたどれると考えられるようになった。それはすべての生命の一体性
の発見を意味する。

1977年、プリゴジーンの散逸構造論がノーベル賞を受賞。物質の自己
組織化能力が明らかになった。

●宇宙カレンダー

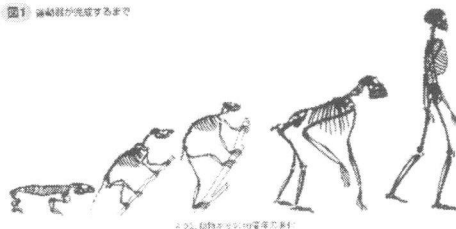
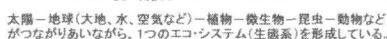
- 1月1日 ビッグバン(宇宙が始まって10のマイナス44乗秒。10のマイナス34乗cm)
午前0時4分12秒 水素原子の創発(10～30万年)
星の中で人体を構成する元素(水素、酸素、炭素、窒素、カルシウム、硫黄、銅、ナトリウ
ム、カリウムなど)が形成される
- 4月9日 大の川瀬川の創発(100億年前)
8月20～26日 原始太陽系の創発(46～50億年前)
8月31日 地球の創発(46億年前)
9月16～21日 生命の創発(38～40億年前)
10月18～21日 酸素発生型光合成生物(27～28億年前)
11月21日 有性生殖の始まり(15億年前)
11月30日 明確な酸素大気が地球上で確立しはじめる(12億年前)
12月 5日 多細胞生物の誕生(10億年前)
12月15日 最初の陸地
12月16日 古生代カンブリア紀始まる(5・7億年前)、無脊椎動物繁栄。
12月18日 オールドバシ紀(5・1億年前)、最初の脊椎動物＝魚類。
12月20日 シルル紀、陸産脊椎動物、植物の陸地移動始まる。(4・4億年前)
12月21日 デボン紀始まる。最初の昆虫、動物の陸地移動始まる。最初の有線陸生。
12月22日 最初の木本、最初の両生類、石炭紀始まる。
12月23日 最初の爬虫類、ペルム紀(二叠紀)、哺乳類型爬虫類の繁栄。
12月24日 生物大絶滅、中生代三畳紀(2・5億年前)、最初の哺乳類、恐竜。
12月26日 ヴェウ紀、最初の鳥類。
12月28日 白垩紀、最初の花、恐竜絶滅始まる。
12月30日 新生代第三紀、哺乳類の繁栄、最初の霊長類、霊長類の前猿の初期進化。
12月31日 最初のヒト科生物(ホミニド)、第三紀鮮新世終わる。第四紀(更新世、
完新世)、最初の人類。



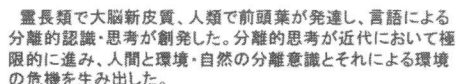
著作権 © 2010 株式会社エヌ・エックス・エス。2010年5月14日(金) 16時48分配信

アメリカ・ブランドイス大学の生化学者ダグラス・セオバルド氏は、生物の3つの大きな分類(ドメイン)に属するすべての種が共通の祖先から進化した確率と、複数の異なる生命体から進化した確率、アダムやイブのように現在の形態のまま発生した確率などを、コンピュータモデルと統計モデルを用いて算出していた。

セオバルド氏によると、「複数の祖先が存在したとする説で最も有力なもの」は、1つの種が真正細菌に進化し、1つの種が古細菌と真核生物に進化したという説である。しかし今回の分析結果から、その確率は10の2680乗分の1であることがわかった。……「これは天文学的な数字で、あまりの小ささに、口にするものばかりでしかないほどだ」。



12月29日(6千5百万年前) 霊長類の創発、30日 ヒト科生物の創発



しかし、人類も宇宙の一部であり、人類において、宇宙は自己感覚、自己認識をしていると解釈できる。さらにブッダなどにおいて、宇宙の自己覚醒が始まっているのではないかと

そして、宇宙は137億年かけて、自己組織化・自己複雑化という意味で〈進化〉し続けており、進化はこれからも続く、ということになる。

一つの宇宙エネルギーのある部分が物質となり、物質が地球で複雑化を遂げて生命となり、生命が多様に複雑化を遂げ、環境と多様な生命によって1つの地球生態系が形成された。とすれば、地球生態系の創発そして持続も、宇宙の意思であると解釈できる。

そうした現代科学のコスモロジーを基礎にすることによって人類全体が共有できる、すべきエコロジカルな倫理も引き出すことができるのではないか

人間は、私たちが「宇宙」と呼ぶ完全体の一部、すなわち時間と空間を限定された一部である。

人間は自分自身を、そして自分の思考や感情を、他と切り離されたものとして体験する。

それは意識のうえで、いわば視覚的錯覚が起こっているからである。

私たちはこの錯覚という監獄に閉じ込められているせいで、個人的な判断しかできなくなり、周りの少数の人間しか愛せなくなっている。

この監獄を抜け出し、思いやりの輪を広げ、あらゆる生物と美しいままの自然を包み込んでいくこと、それが私たちに課せられた仕事である。

——アルバート・アインシュ

タイン

「持続可能性」＝「自然との共生」が問題になるのは、人類(の一部)が近代的な分離思考をベースに形成した社会経済システムによって、資源の大量利用→大量生産→大量販売(ここまでは企業)→大量消費(主に市民)→大量廃棄(企業も市民も)を行ない、地球生態系を破壊しつつある＝持続不可能になりつつあるからである。

※したがって危機を克服し持続可能にするには、思考のあり方も社会・経済システムも変える必要がある(現状の延長では不可能！)。

持続性の2つの側面

社会的持続性: 経済と福祉の関係を
トレードオフから相互促進に

環境持続性: 経済と環境の関係を
トレードオフから相互促進に

※この二つの面が共に満たされてはじめて「持続可能」になる。

持続可能な社会の2モデル

- 1) 先進国型: 緑の福祉国家＝北欧モデル
- 2) 開発途上国型: 農林水産業＋エコロジカル(オルタナティブ)・テクノロジー、知識産業
EX. ブータン、キューバ、コスタリカ etc. の試み

※日本は後戻りして開発途上国型を選択することは不可能。先進国型を選択する他ない。

なぜ、スウェーデン・モデルか (スウェーデンの国際ランキングにおける順位)

1. 国の持続可能性ランキング 第1位スウェーデン、第2位フィンランド、第3位日本
2011年: 国際自然保護連合 (2004年、2007年、OECDの30ヵ国の「持続可能性」ランキングでも1位は同じ)
2. 投資環境が最良のランキング 第1位スイス、第2位スウェーデン、第3位日本
2006年: 世界経済フォーラム (ダボス国際会議)
3. 環境的痛みやストレスのランキング 第1位フィンランド、第2位スウェーデン、第3位日本
2007年: 「リーダーズダイジェスト」誌
4. 国民の幸福度ランキング 第1位デンマーク、第2位フィンランド、第3位スウェーデン、第4位日本
イギリス、レスター大学ホワイト氏の研究
5. 国際競争力ランキング (WEF) 第1位スイス、第2位フィンランド、第3位スウェーデン、第4位日本
2007年: 世界経済フォーラム
6. 国際競争力ランキング (IMD) 第1位アメリカ、第2位スウェーデン、第3位フィンランド、第4位日本
2007年(??): 国際競争力開発研究所
7. 政府の透明度ランキング 第1位アイスランド、第2位フィンランド、第3位スウェーデン、第4位日本
Transparency International 2008.1/29

民主主義国家においては、国民が主体となって平和裡に「持続可能な国家」を創り出すことが可能である。

しかしその実現のためには、国民がそのことを認識し、意欲的に取り組み、そのプロセスで本末転倒にならない倫理性を身につける必要がある。

※それを実現するには、人と自然、人と人のつながり・一体性への深い気づきに基づく「つながりコスモロジー」が必要である。

聖徳太子「十七条憲法」には、仏教的な縁起の理法を核とした神仏儒習合思想＝「つながりコスモロジー」によって、人と人との平和、人と自然との調和に満ちた「和」の国を創成しようという、きわめて高い国家理想が掲げられており、その精神はスウェーデン・緑の福祉国家の基礎となっている「国家は国民の家でなければならない」という理念と深く通じるものがある。

また、すべての存在・宇宙の一体性を語る仏教のコスモロジーと現代科学のコスモロジーは、内面からと外面からというアプローチの違いはあるが、どちらも「つながりコスモロジー」であるという意味で非常に調和する。

エコロジカルな持続性はいうまでもなく地球生態系規模にまで至らなければ完結しないが、現在、世界は国民国家単位で営まれているので、私たちの課題も、当面まず私たちの国日本をいかにしてエコロジカルに持続可能な国にするか、ということになるのではないか。

「十七条憲法」・仏教の意味を再発見し、現代科学のコスモロジーと融合し、スウェーデンモデルを参照すると、その先に、自然と共生する＝エコロジカルに持続可能な日本が見えてくるのではないかと思われる。